

<口腔の役割>

SA MU RA I サムライ !

日本人は我慢強い民族と言われます。昔から我慢するのが美德であり、弱みを口に出すのは格好悪いという文化で育ってきました。しかしそんな日本人でも歯医者に対しては怖いイメージが強く、苦手な人が多いようです。

歯科医院に一歩入ると独特なにおい、診察室から聞こえる子供の泣き声、歯を削られるキーンという音や振動、麻酔が効かずに痛かった、消毒剤が苦かった、そして先生が至近距離で怖かったなど、不快な経験が五感で記憶されるため、そのトラウマから他の医院や病院に比べて歯科医院には行きたくない人が多いのです。

歯医者に気兼ねして、自分が本当に困っていることを相談しにくい人も多く言葉にしなくとも、辛そうにしている姿から何かを察してくれと期待があるのでしょう。しかし言わなければ歯医者は気付きません。患者さんが「大丈夫です」と強がれば、「そうか、まだ頑張れるのか」と思われるだけです。むしろ弱音を吐いて相談することで、歯医者嫌いを克服できるかもしれません。

さて近年、訪日外国人の増加や在日外国人の定住化により、日本の歯科医院でも外国人患者の来院が珍しくなくなりました。観光地や都市部に限らず、地方でも外国人労働者や留学生が歯科医院を訪れる機会が増えていますが、当院も例外ではありません。最近では歯科口腔外科にも中国、ブラジル、フィリピン、タイ、ベトナム、バングラデイッシュなど様々な国籍の患者さんが“親知らず”を抜歯するために来院するようになりました。

ここでやはり最も大きな障壁は言葉の問題です。NPO 法人や厚生労働省が準備した多国語医療問診表などもありますが、実際の会話にはほとんど役に立たず、現実は現場任せの状況です。通訳の人が同行してくれれば良いのですが文化も違い、日本語が全く分からぬ場合は、翻訳アプリなどを使用しても、通常の数倍の時間と労力を要します。今後はさらに外国人の患者さんが増加することが予想されるので医療現場が混乱しないよう早急に国の対策が必要でしょう。

数年前、インドネシア男子留学生の“親知らず”を帰国前に抜歯をする機会がありました。幸い同じインドネシア人の女性の通訳が同行してくれました。問診のやり取り、事前の手術説明は通訳がしてくれました。いざ本番。親知らずの抜歯は難易度が高いので国籍を問わず怖いものです。さすがに患者さんの留学生もかなり緊張している様子です。患者さんの隣に通訳が立ち会い、手術が始まりました。「今から麻酔をします」、「痛かったら手をあげて下さい」「今から音が響きます」、「鼻で呼吸をしてください」等、こちらの言葉をひとつひとつ通訳が伝えました。そして開始からおよそ20分、抜歯が完了しました。「抜けましたよ」と同時に「よく頑張りましたね、あなた強かったです」と言った瞬間、通訳は留学生に“SA MU RA I！”と声をかけて拍手をしました。留学生もそれまでの緊張はどこに行ったのか、笑顔がこぼれていきました。親知らずの抜歯手術の後、国籍が違えば同じ日本語の使い方でもいろいろあるのだなと、当時感心した覚えがあります。

今年、終戦から80年を迎えました。敗戦直後、インドネシア駐留日本軍の中には祖国に帰還せず、日本軍から命がけの離隊や脱走をした多くの日本兵が残り、インドネシアの独立のために地元の独立義勇軍とともにインドネシア独立戦争に参加しています。4年5か月の間、再度の植民地化政策をしかけたオランダ軍と対戦し、インドネシア独立義勇軍の兵士とともに加勢した多くの日本兵も亡くなりました。当時、同じ肌の色をした現地の人々に戦術を教え、日本精神、武士道、犠牲的精神を貫いた日本兵たちはインドネシアの独立後も“日本のサムライ”として戦死した独立義勇軍の兵士たちとともに、現地の英雄墓地に眠ります。

今思えば帰国した留学生と通訳にとっての「サムライ」には特別な思いが込められていたのかもしれません。

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】





独立戦争参加民兵の像（バリのあれこれ 独立戦争英雄墓地）

www.welcome-to-bali.com/log/bali/eid47.html